

The 17th Society for Neuro-Oncology: SNO,
Washington DC, November 15-18, 2012

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/33591

『学会見聞記』

第17回アメリカ脳腫瘍学会に参加して
The 17th Society for Neuro-Oncology: SNO,
Washington DC, November 15-18, 2012

田 中 慎 吾

金沢大学大学院医学系研究科
脳・脊髄機能制御学 博士課程4年

2012年11月15日から11月18日にかけてワシントンDCで開かれた第17回アメリカ脳腫瘍学会に参加させていただきました。ワシントンDCの正式名称は、ワシントン・コロンビア特別行政区といい全米50州のどこにも属さない連邦政府機関として独立した場所です。また知ってのとおりアメリカの首都でもあります。当学会には脳神経外科医を始め、脳腫瘍研究者、脳腫瘍病理医、脳腫瘍放射線治療医など脳腫瘍の研究と治療に携わる医師・研究者が世界中から約1000人集いました。その内、日本からは約50人の脳神経外科医が参加しました。小松-成田-ワシントンDCの経路で行きましたが、飛行機は満席状態でその閉塞感と時差の影響で12時間という長距離飛行中一睡もできないまま到着しました。学会開催日の前日着だったので安心していましたが、事前予約したはずの宿泊先のホテルに自身の部屋が予約されていないトラブルが発生しました。このトラブルに追い打ちをかけるように不眠からくる疲労が重なり、初めてのアメリカでドン底へ突き落された感じがしましたが、幸い空き部屋を確保してもらい大変安堵しました。翌日午前8時から、学会が開催されました。脳腫瘍基礎研究および臨床研究の最新知見を盛り込んだ教育講演から始まりました。教育講演は丸一日あり、各エキスパートの先生方から脳腫瘍の遺伝子変異から各種抗癌剤・分子標的薬を使用した臨床試験の結果まで大変興味深く勉強になる内容でした。2日目、3日目は朝7時から sunrise session があり休む間もほとんどなく午前中は講演が継続し、午後から主に脳腫瘍の basic science と clinical science に分かれて口演があり夕方からポスターセッションがありました。特にポスターは展示数が非常に多く、興味深いものもたくさんあるため時間内に全てを見るのは大変でした。

私は、“The impact of glioblastoma resection on patient's survival” という演題で3日目にポスター発表をしました。Glioblastoma (神経膠芽腫) は脳という重要臓器内に発生することと腫瘍細胞の周囲脳への浸潤のため他の癌と異なり完全な腫瘍摘出は不可能です。これまでに腫瘍摘出率の向上が生命予後に影響するかどうかは明確なエビデンスが得られていませんが90%以上の腫瘍摘出率が予後延長に寄与するという主旨の臨床研究結果を発表しました。英語力に自信がないため、内容の説

明だけでなく想定質問とその答えを事前に念入りに準備しておきましたが、質疑応答には冷や汗をかきました。この学会参加を通して最新の研究内容や臨床試験など大変勉強になりましたが、やはり私にとっては言葉の壁が非常に高いことを自覚させられ英語の重要性を再認識させられました。

観光については、学会前日は疲労感が強く複数あるスミソニアン博物館のうち国立自然史博物館と国立航空宇宙博物館を見る程度で終了しました。地下鉄が発達しており切符の買い方を一旦覚えてしまうと移動には困りませんでした。また学会時は夕方のセッション終了後に夕食に出かけがてら夜の街並みを眺めながらの散歩を楽しみました。様々なレストランがあり、現地滞在歴のある先輩からの事前情報に従い、抜群のステーキと中華料理を堪能しました。帰路は偏西風の影響で約15時間かかったのですが飛行機内は空席が多く、エコノミークラスなのにビジネスクラス並みのスペースでストレスを感じず無事日本へ帰ってこることができました。

最後にこのような貴重な学会参加の機会を与えていただきました当教室の濱田教授をはじめ医局スタッフに心から感謝を申し上げます。

